
あおに重なる

がっちょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あおに重なる

【Nコード】

N0899Z

【作者名】

がっちょ

【あらすじ】

獣族と魔族がくらす世界、リトビスに現れたのは、記憶を失った少年。少年の存在はまさにありえないもので、困惑しながらも生活していく。リトビスの紛争に巻き込まれた少年は、自分に隠された大きな秘密を知っていく。

プロローグ（前書き）

初投稿です 文章力なんて全くないですが（<ー>）のんびり書きますので、是非読んでください。

プロローグ

歪みのない綺麗な月

届きそうに届かない

近そうに遠い

吸い込まれそうな黒

浮かぶ あおい月

どんどん薄れてゆく

僕の記憶の中の…

木枯しが吹きはじめたこの日。僕はいつものように学校へ行くため、家のドアを開けた。肌寒い気温に体が震え、学ランの襟に首をつづめる。

「ワン！ ワン！」

庭から愛犬、柴犬のコタローが駆けてきた。名前を呼ぶと、僕の足を元気に走り回る。

「相変わらず元気だな。学校から帰ったら、散歩に連れて行ってやるからな」

「わかった」とでも言うように一際大きく吠えたコタローの頭を撫で、僕は道路に出た。
近所の人たちと挨拶をかわし、横断歩道にでる。
信号が丁度赤になり、足を止めた。冷たくなった両手を擦り合わせていると、目の前を軽自動車が走った。そのせいで、冷たい風が体を襲う。

「寒っ」

『主様。お時間がきました』

知らない声。突如頭の中に響いた声に振り向く間もなく、視界は闇に包まれた。

デイマイオス大陸。

緑鮮やかな森の中。地には色とりどりの花が咲き、木の上では鳥がさえずっている。

日に照らされ淡緑に色付く森の中に、少女の姿があった。

少女は地面に座り、花を優しく摘み取っている。

鼻歌を交えながら花を摘んでいた少女の耳がピンと立った。その耳は獣のような白い耳。そして、スカートからは白い足と白い尾が覗いている。

少女は辺りを見回しながら耳を動かし、何かを見つけようとしていた。

すると、一点の方向を見つめ、摘み取った花を握ったまま、その方向へ走り出した。

辺りを気にしながら走り、周りよりも少し太い木の裏を覗いたとき、

少女は「あっ」と声を漏らした。

視線の先には、木にもたれ掛かるようにして少年が眠っていた。少女はまじまじと少年を見た後、正面からその顔を覗いた。そして口を開く。

「だあれ？」

問いかけに応えるように、瞼がゆっくり上がった。

始まり〔1〕

彼は目を開けた。

黒曜石のような瞳で空を見る。視界に広がったのは黄色い天井。

ここは…？

火の光で辺りは明るかった。ぼんやりとしていた意識がはつきりしてきたことで、寝ている自分の体に何かが乗っているのに気づいた。顔を少しあげてみると、足のところに少女が丸くなって寝ている。そして彼は目を見開いた。

耳…なのか？

目を奪われたのは伏せられている白い耳。獣の耳を持つ少女をおこさないよう、体を起こそうとした。

が、思ったより体に力が入らず、足元の小柄な体を蹴ってしまった。

「うん…」

小さな声に彼はピタツと動きを止めた。「ふああ」と欠伸をし、目を擦りながら少女が起き上がる。

開いた青い瞳が彼を捕らえると、表情がぱあっと明るくなった。

「目が覚めたんだ！」

眼前にせまつた少女に少し後退する。

「森の中で寝てたんだよ」

「森？」

「うん。カミアが見つけたの」

「カミア？」

「カミアだよ」

自分を指して言ったところから、「カミア」というのは少女の名前のようだ。

カミアは膝立ちになり小首をかしげた。

「あなたは？」

「えっ」

「あなたの名前は？」

そう訊かれ、答えようと口を開いた彼の動きが止まった。

僕の…名前？

どれだけ頭の中を探ろうとも、答えは出てこない。それ以上に恐怖が溢れてきた。

彼の中には何も無かった。

「僕は一体…」

呟いた言葉にカミアが首をかしげていると、部屋の大きなドアが勢いよく開かれた。

ドタドタという荒々しい足音と一緒に三人の男が入ってくる。

「カミア、身元の知れない者を城に入れたというのは本当か！」

先頭にいた金髪の男が叱るような口調で言った。

「もう、ケイト!」

カミアが頬を膨らませていると、一番後ろにいた茶髪の少年がおどおどした様子で前へ出た。

「申し訳ありません。バレてしまいました」

「ケイトのドジ! 約束したでしょ!」

「カミア、我が儘はよせ」

目の前の会話を、彼は呆然と見ていた。驚いたことに、カミアと話している二人にも獣の耳があるのだ。

金髪の男はカミアと同じ白い耳と尾。少年は茶髪より薄い色をした、ふわりとした耳と尾である。

「ひっ!」

急に右耳の辺りを触られ、とつさに右側を見れば、二番目に入ってきた緑髪の男が、彼の黒髪をあげて耳をじっと見ていた。そしてこの男にも獣の耳と尾。

「この子、獣族じゃないみたいだよ。魔族でもないし」

「それは本当か!」

そう言うなり、金髪の男は腰の剣を抜き、切っ先を彼にむけた。

「おい、お前は何者だ」

「いや、その…僕は…」

突然刃物を向けられ、混乱している彼の脳裏がフラッシュした。何もなかった頭の中に、ある文字が浮かぶ。

「神崎…神崎郁斗です」

「は？」

「僕の名前…です」

「カンザキ？ おかしな名だ。カンザキとやら、どうやって城に入った」

「城…？」

その言葉に彼…郁斗はぼかんと口を開けた。

「まさか、知らなかったとは言わせんぞ」

「はいその通りです」と言ってしまうは、目と鼻の先にある剣が牙をむく。そう判断した郁斗は何を言えばいいのかわからず、目を泳がせた。

そんな彼を助けたのはカミアだった。

「もう！ やめてよヴィル」

郁斗と剣の間に割り込み、男を睨む。

「さん付けで呼べと、何度も言っただろう」「意地悪なヴィルはヴィルでいいもん」

眉をピクピク動かし、今にも怒鳴りそうな男の肩を、緑髪の男が掴んだ。

「落ち着けよヴィル。冷静になれって」

「なんだ、お前から斬られたいか」

「お 恐っ。さっき言っただろう、この子は獣族でも魔族でもない。よく見る」

「なら一体…」

金髪の男は何か気づいたかのように顔を上げ、郁斗を見た。次に何を言われるのかと思い、郁斗の体が固くなる。

「嘘だ。魔力が無いだど!? それに黒の眼…」

そう、ありえない組み合わせだ」

「黒眼の人間…」

心底驚いた様子の男は剣をおさめ、踵を返す。

「とりあえず兄上に報告だ。それまでここを動くな。行くぞ、リイド」

「はい。それじゃあね」

二人の男が部屋を出たことで緊張が解け、郁斗は大きなため息をついた。

静かになった部屋の中で、一番最初に動いたのはカミアだった。

「どうしよう、アズにみつかっちゃっ」

「仕方ありませんよカミア様」

目の前でしょぼんと垂れている耳を見て、郁斗はカミアの頭を撫でた。

「よくわからないけど。僕のせいで迷惑がかかってるみたいだね」
「違うの。悪くないから」

今にも泣きそうなカミアの頭を撫でていると、茶髪の少年がベッドの側に立った。

「改めましてカンザキ様。僕はカミア様の従者、ケイト＝リガルと申します」

「あ、神崎郁斗です。別に「様」とかけなくても…。名前で呼んでください」

「カンザキというのが名前では？」

「神崎は名字で、郁斗が名前です」

「不思議な名前ですね、イクト様は」

「いや、だから「様」は…」

ケイトは困ったように笑う。

「僕は従者の身なので。ではイクト殿でどうでしょう。僕への敬語は不用です」

ケイトは笑顔のまま言った。

これ以上何を言っても彼はきかないだろう。そう思った郁斗は頷いた。

どこか固い自分の呼び方に疑問をもったが、何も聞かないでおい

「それでは」ケイトが何かを差し出してきた。

「イクト殿が来ていた服を綺麗にしておきました」

そう言われ、郁斗は今自分が下着一枚の状態であることに気づき、

ケイトからひつたくるように服をとった。

自信が着ていたという服を着た郁斗は困惑していた。

ここはどこなんだろう。

ここの人たちは皆、動物のような耳と尾があって、どうも違和感がある。

僕がそうじゃないからかな。

それより僕は？

自分がわからなくて…怖い。

「イクト、真っ黒だね」

カミアの声で我に返った。

「そうだね、カミア」

自分の姿を見て郁斗は同意した。黒の学ランに黒髪黒眼、まさにカミアの言う通り。

「そういうえば、さっきの二人は誰？」

「ヴィルとリイドだよ。ヴィルは意地悪で、リイドは面白いの」「最初に入ってこられた方がヴィンセント様で、一緒におられたのがリイド様で…」

カミアの説明では郁斗が理解できていないと察したのか、ケイトが付け加えた。

ベッドのシーツを整えて郁斗を見たとき、その目が大きく開かれた。

「イクト殿…魔力が」

「へ？」

魔力？ さっきもそんなこと言ってたな。

訊こうとしたとき、部屋のドアが開いた。
そこに立っていたのは、ヴィンセントとリイド。

「おいお前、ついて来い」

「ヴィル！」

走り出そうとしたカミアをケイトが止める。

「ケイト、カミアをつかまえておけよ」

「はい…」

カミアとケイトにこれ以上迷惑はかけたくない。そう思った郁斗は、「行くぞ」と言ったヴィンセントの後をついていった。
大きな廊下を歩く。ヴィンセントとリイドは背が高く、足も長いせいか、郁斗は二人の後ろを小走りに走っていた。

「どこへ行くんですか？」

「兄上のところだ」

「兄上？」

この人兄弟がいるんだ、と思っている郁斗に振り向くことなくヴィンセントが続ける。

「俺の名を聞いただろう。それで分かんのか」

はあ、とため息をついて言ったヴィンセントの言葉に郁斗は絶句する。

「俺の兄上は王だ」

「お前がカンザキイクトか」郁斗はヴィンセントに険をむけられた時以上に、体をこわばらせていた。

通された場所は大きな空間。天井はガラス張りで光がよく入り、「神聖」という言葉がぴったり合う。

郁斗が見つめる先は壇上。そこにある大きな椅子に座った人物だ。

「私を知らぬようだから名乗っておこう。私は獣族の王、アスライトⅡベオⅡランディーヌだ」

獣族の王、もといヴィンセントの兄は郁斗に微笑んで言った。

王と言えど、容姿は若い。

ヴィンセントと同じ金髪に白い獣の耳。しかし、短髪の弟とは対比に、兄は襟足まである。

温厚な雰囲気醸し出しているが、どこにも隙をみせていない。

目を留められた瞬間、郁斗の体は直立してしまった。

「おい、何か言ってみてはどうだ」「は、はい！ 神崎郁斗です！

あ、神崎が名字で郁斗が名前です」

ケイトのような勘違いをおこさないよう、きちんと名乗っておく。

「本当に魔力は微塵にも見られないな。見える魔力はその服からでている」

この服から？

学ランを見ていた郁斗の左側からヴィンセントが発言した。

「兄上、こいつが人間なわけないだろう」

「だが現に目の前にいる」

「こいつは黒眼だ。なら魔族だろ。しかも…」

「それはないわ」

ヴィンセントの言葉が遮られた。

初めて聞く声に振り向くと、柱の影から女が出てきた。

左に流れた朱の髪を揺らしながら、女はゆっくり近づいてくる。

綺麗なひと…。

けど、あの耳は…？

郁斗が目を留めたのは彼女の耳。郁斗と同じような形をしているが、それは長くががっている。

近づいてきたかと思えば、少し腰を折って郁斗の顔を覗いた。綺麗だと思っていた顔が目の前に迫り、郁斗はドキリとした。

「眼の色は本物。けれど魔族じゃない。耳も全然だしね。突然変異の可能性もゼロ。今までの事例で人間との間にできた子供は全て魔族。それは獣族も同じでしょ」

女の言葉にヴィンセントが口を紡ぐ。

「じゃあシャリー、この子は人間なのか？」

「そういうことになるわね」

ライドにシャリーと呼ばれた女が頷く。

「それと記憶も無いそうだな」

「ふん。何も知らない顔して、何かたくらんでいるのかもしれん」
「そんな、僕は本当に…」

反発した郁斗の目先に、再び剣がむけられた。

「さあ、どうだか」

「ヴィル！」というリードの声も聞こえてないらしいヴィンセントは、低い声で言った。

いやだ…！！

再び襲ってきた恐怖に郁斗が叫んだ。

その瞬間、キンツ という金属音。ヴィンセントの手にあった剣が、少し離れた位置に落ちる。

何が起こったのか理解できていない郁斗を、全員が驚愕の目で見ている。

「えっと…今何が…？」

「魔力で弾いたようだな」

いたって冷静にアスライトが状況を把握する。

「何故人間が魔力を！」

「どうやら服にこめられた魔力は、彼を守るためにあるようだ」

会話に追いつけない郁斗はおろおろするばかり。

「カンザキイクト」

「は、はい」

アスライトと呼ばれ、小さく返事をする。

「お前を人間としてこの城で保護しよう」

「兄上！」

「リトビスを学ばねばならないからな、ヴィンセントの従者として居座れ」

それは郁斗にとって嬉しい話だ。記憶のないままどこかへ放られてしまうのでは、と思っていたところだったのだ。

このままじゃ、どうにもならないし…。

お世話になってもいいよね。

「はい、わかりました。よろしくお願いします」

「イクト、でいいんだっけ？」

「はい」

アスライトと話を終えた郁斗は今、ヴィンセントの部屋に来ていた。ソファに座り、隣のリードと自己紹介をしている。

「俺はリード。マスイト。騎士団の副隊長やってんだ」

「騎士なんですか！　すごいですね」

「そんなに誉められてもなあ。毎日忙しいんだぜ、隊長にこきつかわれて」

「隊長は誰なんですか？」

興味本意できいてみた事に、リードは視線を上げた。

「あそこの仏頂面」

リードの視線の先には、机で執務をこなしているヴィンセント。自分の中で一番恐い人に指定されている人物が隊長と知り、郁斗はソファの上を後退する。

「おいヴィル。イクトに説明することが山ほどあるんじゃないの？」

「明日から6時に俺の部屋に來い。お前の部屋はケイトと同室だ」

顔を上げることなく言った言葉に、リードがため息をついた。

「言うことはそれだけかよ」

すると、ヴィンセントは今まで書いていた紙を宙へ放した。床に落ちる既の所でリードが拾う。

「あとはお前の仕事だ」

「面倒事は全部俺かよっ！ はいはいわかった、行こうイクト」

リードについて部屋を出るとき、郁斗はふと後ろを向いた。数秒とかからないうちにヴィンセントが見返す。

「なんだ」

「あ、いや。明日からお願いします」

「言っておくが」持っていたペンを郁斗にむける。

「俺は兄上の命でお前を従者として扱う。それ以外は何一つ、お前

の存在を認めんからな」

「…はい」

郁斗は痛々しい視線を背に感じながら部屋を出た。

「なに気にすることないって」

廊下を歩きながら、リードが郁斗を励ます。

先ほどヴィンセントの部屋を出てから、ずっと何かを考えている郁斗を見かねたのだ。

「あ、いえ。リードさんってヴィンセントさんとは仲がいいんですか？」

「なんで？」

「いや、ヴィンセントさんのことを愛称で呼んでるから」

「まあ、幼なじみというか。もうかれこれ25年付き合ってるからなあ」

「リードさんていくつですか？」

「25」

答えたリードは郁斗をじっと見る。

「イクトは13に見えるけどな」

「僕は17! …のはずです」

「17? 見栄はりすぎじゃないか？」

「本当ですって!」

「ははっ！ そりゃわるかったよ」

気さくに笑うリイドにつられ、郁斗も少し笑った。
ここへきて、初めて笑顔になれた瞬間だった。

灯りが灯った薄暗い廊下を歩いていて、もう日が沈んでいたことに郁斗は気づいた。

そして、二人が来たのはとある部屋の前。

「ここは？」

「ケイトの部屋だ」

ドアを開けると、部屋の中にはベッドのシーツを整えているケイトがいた。

「イクト殿！」

郁斗を見たケイトの顔が晴れやかになる。小走りで駆け寄ってきた。

「聞きました。ヴィンセント様の従者をする事になったんですよ」
ね

「うん。よろしくねケイト」

「僕も嬉しいです。イクト殿が城に残ってくれて」

ケイトは郁斗の右手を握り、上下に振る。よほど嬉しいのか、茶色のふわふわした尾が左右に揺れている。

「あ、そういえばカミアは？」

「あれから大泣きで…。泣き疲れて寝てしまいました」

「明日、ちゃんと謝らないとね。心配かけたみたいだから」

「おっとお前ら、喜びの再会はそこまでいいか？」

リイドが紙をひらひらさせて言った。

「あ、そうでしたね。説明お願いします」

「おう、いいぜ」

リイドは紙に目を落とすと、直ぐさま嫌な顔をした。紙一面に文字が綴られていたからだ。

「えーっと、無断に城内をうろつくな、見知らぬ者と口をきくな、面倒をおこすな、些細な変化も報告、俺の命令は絶対……だあー！
！ 細けえっ！！」

読んでいたリイドの声は次第に小さくなり、しまいには内容に苛ついたので、頭をかきむしった。

「こんな内容だろうと思ったぜ。いちいち煩いやつだ」

「はは……。ヴィンセント様らしいですね」

苦笑いのケイトの隣で、明日からの仕事に心配を募らせている郁斗。

「まともな事は書いてねえのか？ お、これが」

ある一文を見つけたリイドは郁斗に近づいた。

「動くなよ」と言つて右手をかざす。

何が起こるのかと思つていた郁斗の目の前で、何かがパツと光った。

「よし、これでオーケーだ」

「え、何がですか？」

「見て下さい」

ケイトが持った鏡を見た郁斗は目を丸くした。黒眼だったはずの自

分の瞳は、紫に変わっていたのだ。

「俺の魔法で眼の色を変えさせてもらったぜ」

「ま、魔法!？」

「聞きたいだろうけど後回しにしてくれ。えっと次は…」

そんなあ…!

「その服は常に着ること。後は、これだな」

リイドが何かを取り出した。それは、細いヘアバンドの両端に獣の耳がついたもの。

「それは？」

「まあまあ、つけてみるって」

ヘアバンドをつけられ、耳もつけられた。耳の中は空洞になっていて、そこに丁度郁斗の耳がはまる。

「…なんですかコレ？」

「イクトが人間だってバレないようにするための。それと尻尾」

ふわふわの茶黄色をした尾を手渡される。

なるほど、コレで獣族になりすますということですね。

でもなんか…すごい恥ずかしいんですが…。

すぐくふわふわ…。てか本物みたい…。

そこまで考えて、郁斗にある恐ろしい考えが浮かぶ。

「あの、一応確認しておきたいんですが…。これはまさか本物…」
「安心しな。魔獣の毛でつくられた造りものだ。それよりそっちもつけてみるって」

リイドにいわれ、尾についたフックをズボンに引っかける。ケイトが持っている鏡を覗くと、眼の色も変わったせいか、郁斗は獣族になっていた。

「へーすごい」

「今、イクトが人間であることを知っているのは極限られた数人だけだ」

「どうしてですか？」

「最後に」

またもや放らかされ、今度ばかりは郁斗の眉が歪む。

「常識をつける。以上だ」

「常識…」

「そういうことで、俺は帰るな。明日から頑張れよ」

右手をひらひらさせながら、リイドは部屋を出ていった。

ほとんど投げやりですね…。

ガクンと頂垂れた郁斗に、慌ててケイトが話しかける。

「イクト殿！ 分からないことは僕に聞いて下さい。助けになりますから」

「ありがとうケイト。それでさあ」

「なんでしょうか？」

「今日はもう疲れたから、寝てもいいかな」

体力的にも…内面的にも…

郁斗がこの世界に現れて3日がたった。そして世界のこともしずつ知っていった。

毎晩寝る前にケイトから少しずつ。

この世界、リトビスには大きく分けて大陸が3つある。

デマイオス大陸、セガル大陸、ファイライト大陸。

リトビスには魔法が存在し、生き物には魔力がそなわる。が、唯一魔力のなあ種族がいた。それが人間。

3つの大陸には主にそれぞれ、獣族、魔獣、人間が住んでいた。しかし、もうリトビスに人間は一人としていない。

「どうして?」

「それは…明日にしましょう。今日は長すぎましたね」

昨日言われてから、郁斗はずっと話の内容が気になっていた。

そのせいか、郁斗はいつも以上に失敗を繰り返していた。ガシャンッ

「熱っ!」

5つ目のコップが今割れた。5つというのは、郁斗がヴィンセントに「茶をいれる」と言われる度に割ったコップの数。

ケイトに教えてもらっているときは、なんなくこなしているのだが、ヴィンセントがいるせいかどうもうまくできない。

背中に痛々しい視線を感じて振り向くと、「またか」と言わんばか

りの目をむけるヴィンセントの姿。その眉間に皺が寄る。

「ご、ごめんなさい！」

「もういい。片づけたらこれを届けてこい」

「はい…」

床に散った破片を集め、ヴィンセントが指した書類の束を抱えて部屋を出た。

一人になった男はため息をつく。

兄上はあれを監視するつもりで従者にしたんだろうが、これでは逆に目が離せない…。

やつは失敗ばかりして、俺の仕事を増やしていると思えん。

「おーい、ヴィル」

そこへ、入れ違いにリイドが入ってきた。

「随分疲れた顔をしているな。イクトは頑張ってるか？」

「どうだか。茶もろくに入れられない、腕力もない。全くもって使えん」

「そう言うなって。イクトだって一生懸命なんだしよ」

「どこが変わった様子もない。何も思い出さない。あいつの謎は深まるばかりだ」

ヴィンセントは頭をおさえ、もう一度深いため息をついた。

「で、そのイクトはどこに行ったんだ？」

「アッシュの所に行かせた」「アッシュ？ 会わせるのか？」

「奴は研究にしか興味がない。別に大丈夫だろう」

ズボンに取り付けられた赤茶の尾を揺らしながら、郁斗はトボトボと廊下を歩いていていた。

「はあ、またやつちやった。ヴィンセントさん、すごく怒ってたし」
ふと、横にあった窓に映る自分の姿を見た。とたんに羞恥がこみ上げる。

その原因はこの耳と尾だった。

なんだろう。コレをつけてると凄く恥ずかしいんだよね。
付けたことあるのかな？

「もえ」って言葉が浮かぶんだよね。

すると、窓の下の方で小さな影が動いた。覗いてみると、下の庭にカメラとケイトの姿があった。

カメラが花を摘んでいるのを、ケイトが見ている。カメラは郁斗のことが余程好きなようで、休憩中はもちろん、仕事にも姿を現しては郁斗にくっついてることが多々ある。

ケイトは耳と尾をこれほどかというほど下げ、謝りながらカメラを連れていく。

その度にヴィンセントは、今にも怒鳴りそうな気持ちを抑えているのがよく分かる。

自分を慕ってくれるカミアとケイトに会うことが、郁斗の心地好い時間になっていた。

ケイトに毎晩、いろいろと教わるのも楽しい。

次の休憩の時は外で遊ぼうか。そんなことを考えながら、郁斗は廊下を歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0899z/>

あおに重なる

2011年12月14日18時57分発行